CHIBA UNIVERSITY PRESS 敬愛大学 ユニバーシティプレス

大学生記者が編集

広がる可能性　学生ボランティア

笑顔、感謝 新たな縁も

学生が主体となって参加するボランティアには一体どのような意味があるのだろうか。学生がボランティアをする理由をたどって実際にボランティアに参加した学生や、ボランティア活動を支えている人々を取材し学生目線でまとめてみた。

周囲の支え生かし挑戦を

Case 1　敬愛大学地域連携センター長　藤森 孝幸 さん

敬愛大学では現在多くの学生がボランティア活動に参加している。その活動を力強く支えているのは、同大学地域連携センター長の藤森孝幸さん。「ボランティアは老若男女誰でもできる。できる人ができる時にできることをしよう」と呼び掛ける藤森氏は、学生とともに数多くのボランティアに参加した経験を持つ。ボランティアが秘めている大きな可能性について藤森氏に聞いた。

藤森氏がこれまでの経験で特に印象に残っているボランティアは、東日本大震災の被災地での活動だ。

震災や災害時のボランティアは普段のボランティアと違い、現地に行くまで何をするのかわからない。そんな中、被災地の一つである宮城県に到着してから言い渡されたボランティアの内容は、遺体の捜索だった。「熱中症にならないよう気を遣いながら掘り進み、身体的にも精神的にも辛かった」と振り返る。結果的に、藤森氏が捜索した場所に遺体は見つからなかったという。

後日、震災が起きた年のクリスマスに再び被災地に訪れたという藤森氏。今度はサンタクロースの格好をして現地に向かったという。子供達にプレゼントを届けるため、藤森氏を含む約200人が被災地の住宅を訪問。今年はサンタさんが来ないと思っていた子供達は喜び、笑顔と共に感謝の言葉を受け取ったことがなによりうれしかったという。

自身の体験談と共にボランティア活動のやりがいを語った藤森氏は、学生ボランティアについての持論をこう語る。

「学生がボランティアをするメリットは、ボランティアについてサポートしてくれる人がいること、そして幅広い年代の人々と関係を持てるチャンスがあること」。ボランティアを紹介してくれる人、支えてくれる人がいるというのは当たり前ではなく学生だからこその特権。その特権を無駄使いせず、さまざまなボランティアに挑戦し、たくさんの人と繋がることが肝要だと強調する。

最後に、ボランティアを語るときに自身が大切にしている言葉があると教えてくれた藤森氏。それは「伴走」「自己有用感」「支縁」の三つ。「ボランティアは、して欲しい人としたい人が協力して実施する『伴走』、やってよかったと思える『自己有用感』、ボランティアであった縁を大切にするという『支縁』が重要だ」（井上　優汰）

敬愛大学地域連携センター長の藤森さん

国際交流経験、原動力に

簡易フェンシング考案、普及へ

Case 2　パラリンピックで選手を支援　小枝 亜耶乃 さん

新しいパラリンピックの競技である「ソフトパラフェンシング」を作成した一人である小枝亜耶乃さんは、パラリンピックのボランティアに参加したことが競技作成のきっかけだったという。

ソフトパラフェンシングとは車椅子フェンシングを基にした誰でも簡単にできるパラスポーツ。車椅子フェンシングと違うところは使用する道具。例えば、車椅子はパイプ椅子、剣は「ソフトサーベル」という固くない素材でできた剣など、用具はどれも簡単に手に入るものが使われる。

「コロナ禍でも何かしよう」と思い、パラリンピックのボランティアを始めたという小枝さん。実際にパラリンピックに出場する外国人と接することでコロナ感染の恐れがあるなか、今自分が何をしたら選手のためになるか、どうしたら選手に迷惑をかけないかを意識し、ボランティアに挑戦したという。「今回のボランティアでいろいろな人と知り合うことができて、選手にも感謝されたことがうれしかった」と笑顔で語る。

ソフトパラフェンシングを広めたいという想いが届き、1年に1回開かれるパラスポーツフェスタに初めてソフトパラフェンシングが追加され、多くの人々が楽しんでくれたという。魅力を伝え、さらに多くの人々に新たな競技を楽しんでもらうのが目標だ。（井上　優汰）

ソフトパラフェンシングを実演する小枝さん（右）。パラリンピックへのボランティア参加が新競技を生む原動力となった（提供写真）

やりがい感じ活動11年

将来見据え、大学生も従事

放課後子ども教室運営手伝う　青木 志乃 さん

放課後子ども教室で、小学生とかるたで交流するボランティアの大学生ら＝9月、千葉市稲毛区

小学校の「放課後子ども教室」で、ボランティアとして子供たちの面倒を見ている青木志乃さん。放課後子ども教室とは学童保育のような場で、昔は月に2回の活動だったが、青木さんが子供たちの面倒をみるようになってからは、週に4回という高頻度の活動になった。

就労などで昼間に保護者が家庭にいない小学生が対象の学童保育と異なり、放課後子ども教室は全ての小学生が対象。教室では、子供達がそれぞれ自由に遊んでいる様子が印象的だ。みんなで同じ遊びをするのではなく、まるで学校の休み時間のよう。「子供に自由な時間を過ごしてもらいたい」と青木さんは語る。

セロハンテープを好きなだけ取ってボールにするなど、家では怒られてしまうようなこともここでは許される。「普段できないような経験を大切にしたい」という青木さんの思いが、この教室の雰囲気を作っている。子供たちの想像力を伸ばすためにも自由な経験が重要だ。

今年でボランティア活動11年目を迎える青木さんも、始めた当初は乗り気ではなかった。ただ、続けていくにつれて、子供たちの成長を感じることができたり、小学校の卒業後も子供たちとつながることができたりすることがうれしいと感じるようになった。子供の名前を覚えることなど大変なことも少なくないが、教室がある限りはこのボランティアを続けていきたいと考えている。

実はこの教室に、大学生もボランティアとして来てくれることがある。「将来子供と関わる仕事をしたい」と夢を持つ大学生の鈴木唯人さんは「子供と関われば関わるほど子供が名前を覚えてくれるなど、子供たちのいい所が見つかる」と話す。

放課後子ども教室の活動を実際に見て感じたのは、青木さんが話していた通り、子供が自由に遊んでいたこと。また、片付けのときでは、メリハリを持って動く姿が印象に残った。（井上　優汰、菊地　遥南）